



Title	『韻鏡安見録』と『韻鏡反切名乗即鑑』
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2014, 102, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70931">https://hdl.handle.net/11094/70931</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『韻鏡安見録』と『韻鏡反切名乗即鑑』

岡 島 昭 浩

## 一 はじめに

江戸時代などに、韻鏡による、或いは韻鏡に関連して字音に基づく、姓名判断のようなことがあったのは知られていることであろうし、岡島(二〇〇一)(二〇〇八)でも触れた。本稿で取り上げるのも、そのようなことをする際に使うための書である。

『韻鏡反切名乗即鑑』は、多く流布したものと思われる。『国書総目録』に載るのは七点であるが、現在でも古書店やネットオークションなどでもしばしば目にする。

『国書総目録』では、「韻鏡名乗反字安見録の改題本」と記され、三沢(一九五一)も、

一六七 韻鏡名乗反切安見録 一七七二写一卷 「日本文学大辞典」に見える。<sup>1)</sup> 多田秀湖の作。年月不明。この書は天明六年(一七八六)に「名乗即鑑」と改題刊行せられた。(大阪出版書籍目録参看) ○明和九年書目に「韻鏡安見録、多田

秀銅」と見えるのは、本書と思はれる。著者の秀湖、秀銅は何れも秀洞の誤刻であらう。(本書目一九〇番参看)

一九〇 韻鏡反切／名乗即鑑 一七八六刊一冊 多田秀洞の著、寺尾東海の序がある。凡例の末に「廣瀬幽閑末流 加州金澤 多田秀洞識」とある。天明六年刊。○本書は前に「韻鏡安見録」といったのを改題したもの。小型本。

と指摘するように、改題本であるという判断は、『享保以後』大阪出版書籍目録』に依るものと思われる。同書一二九頁に、  
名乗即鑑 一冊

以前「韻鏡安見録」と題せしを此度改題板行申出  
板元 奈良屋長兵衛(本町二丁目)

右板元よりの申出でを本屋行司にて聞届け板行  
申出年月 天明六年四月

とある。なお、ここは、大阪本屋仲間記録の「開板御願書扣」が現存しない部分であるし、改題板行本であるので「新板願出印形

帳」にも記載がない。

さて、改題前の「韻鏡安見録」は、『大阪出版書籍目録』などには見えないが、江戸の「割印帳」(享保以後江戸出版書目「江戸本屋出版記録」)に記載がある。

同四年冬(宝暦)  
韻鏡安見録 多田秀洞作 板元 戸くらや喜兵衛  
墨付五十丁 小本全一冊 売出し同 人

さらに、安永五年にも、

同五年春  
韻鏡安見録 多田秀洞 全一冊 板元 売出し  
墨付五十二丁 前川六左衛門

と見える。

さらに改題本の「名乗即鑑」についても、

天明六丙午三月  
名乗即鑑 東海述 全一冊 大坂板元 奈良屋長兵衛  
墨付五十三丁 江戸売出し 村源六

と見える。ただし「名乗即鑑」のところには、これが「韻鏡安見録」の改題本であることは記されていない。東海は序を書いた人である。

## 二 天明版『名乗即鑑』

以下、書籍そのもの(および電子的複製)を見る。まずは、よく流布している『名乗即鑑』から確認する。書形は小本である。架蔵の二本に題簽は残っていないが、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されているもの(以下「国会本」)、大阪市立大学森文庫和古書画像データベースで公開されているもの(以下

「森文庫本」、早稲田大学古典籍総合データベースで公開されているもの(以下「早稲田本」、いずれも「<sup>反切鑑</sup>名乗即鑑 全」とあるようである。奥付には、

天明六年丙午三月発行

浪華書肆 心斎橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

とあるものが多い。架蔵の二本のほかに、国会本、森文庫本も同様である。早稲田本も同じ奥付を有するが、次丁に、後刷の際のものと思われる奥付がある。上部に「書肆」とあって、

江戸日本橋南巻丁目  
須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 下谷池端仲町

岡村庄助

同 通本銀町

永樂屋東四郎

大阪心斎橋北久太郎町

河内屋喜兵衛板

同様の後刷の際の奥付と思われるものが、国文学研究資料館の文献調査データベースなどで見ると、他にもあるようだが、一々挙げない。

『大阪出版書籍目録』での届け出時の板元である奈良屋長兵衛の名のある奥付を持つ本は未見であるが、河内屋喜兵衛の他に、

心斎橋北詰

和泉屋卯兵衛

となつてゐるものがある（往来物倶楽部デジタルアーカイブス所収本）。

河内屋喜兵衛の「心斎橋北久太郎町」は、「心斎」と「橋北久太郎町」が、やや離れており、和泉屋卯兵衛の方が先であろう。

なお、「天明六年丙午三月発行」の「発行」も、埋木のように思われるが、これまでのところ、このようになってゐるものしか見ていない。

見返しがあるもの（架蔵二本・国会本）には、「<sup>反韻鏡</sup>切名乗即鑑」とあり、

世に<sup>韻鏡</sup>の書、多といへども、其<sup>伝受</sup>なくしては、反切の法を得がたし。夫反切、名乗字の吉凶を考を緊用とす。此書は其<sup>伝受</sup>なき人にて、五性の相生に就て、父字母字を定め、<sup>韻図</sup>を用ひず、即其<sup>帰納</sup>を得ることを發明す。誠に<sup>不学</sup>して其要を知と云べし（原文はカタカナ、以下同じ）と記され、「浪華書肆 柳原積玉圃藏」とある。

漢文の「名乗即鑑叙」（二丁）は「東海識」とし、三沢（一九五二）は、これを寺尾東海と見ている。寺尾東海については、岡島（二〇一〇）で書いたが、この頃おそらく大阪にいたので可能性はある。序文中では、韻学については、「<sup>韻鏡</sup>」「<sup>切韻指掌</sup>」「<sup>切韻指南</sup>」の書名を挙げる程度で大したことは書いていない。「書肆の需に應じ、且らく玄晏先生と為る」と、序文を寄せたのみの如くである。

「題名乗即鑑」（二丁）は、天明五年己巳之冬、東山力之光公暉

のもの。続いて「<sup>韻鏡反切名乗即鑑凡例</sup>」が二丁半、その末尾に「廣瀬幽閑末流 加州金澤 多田秀洞識」とある。廣瀬幽閑は、弘湊幽閑を指す。『国書総目録 著者別索引』では「こうたんゆうかん」と読まれているが、「廣湊幽閑」と書かれることもあり、「ひろせ」と読む。<sup>6</sup>「弘湊幽閑改正」とある『五百字増補韻鏡』の元禄十一年における源鞠山（割書で「酒井飛彈守」。越前敦賀藩主の酒井忠稠）による序に、「粵越之前人弘湊幽閑者潜心于韻学」と見える。<sup>8</sup>「声音正偽發明韻鏡備考大成」には、「崎陽 三餘齋弘湊幽閑」と見えるが、「弱冠住崎陽三十餘年」で韻学を学び、江戸に出て、鎌倉で没したという。<sup>9</sup>「<sup>韻鏡十二反切</sup>」（九州大学附属図書館音無文庫本。外題は「<sup>韻鏡</sup>」522イ5）には、「幽閑は黄檗南源禪師の伝を得て韻鏡を以て世に鳴りたる人なり」とある。<sup>9</sup>南源性派が隠元とともに来日して長崎にいた頃に、という謂であるうか。『<sup>韻鏡和漢二流指南目録</sup>』（静嘉堂文庫所蔵国語学資料集成・東京大学文学部図書室蔵・写本）、『<sup>韻鏡秘伝諸例</sup>』（東京大学文学部図書室蔵写本）も、幽閑の韻学を伝えるものである。元禄十四年に、『<sup>経史正音切韻指南</sup>」を校訂刊行もしている。

多田秀洞は、後掲の宝暦版「<sup>韻鏡安見録</sup>」（以下『安見録』）では、多田秀洞とあり、それによるべきであろうが、安永本以降「洞」で、本書で同字にタカ・ハルの訓もある（「洞」はホラのみ）。この人物のことは未考で、『安見録』には「加陽金澤士」とあり、加賀藩のことを調べるべきだが、未調査である。

『名乗即鑑』という題名は、『名乗手鑑』<sup>10</sup>や『本朝年代即鑑』を

想起させるが、奈良屋長兵衛が、『名乗即鑑』とほぼ同時期に届け出ている『匿名即鑑』との関係もありそうである。『匿名即鑑』は、国文学研究資料館で画像公開されている八戸市立図書館本を見たのだが、「匿名即鑑附言」は「韻鏡反切名乗即鑑凡例」と、丁毎の行数は異なるが、似たものを感じる。

『匿名即鑑』の奥付に付される「無孔笛道人著七種即鑑刷刻目錄」<sup>13</sup>には、

事類即鑑・名数即鑑・雑字即鑑・匿名即鑑・童字即鑑・字字即鑑・和字即鑑

の七種を載せるが、匿名即鑑以外は刊行されなかったようである。また、矢島（一九七六）によれば、中村玄三『和漢年代即鑑』（寛政十二）も、奈良屋長兵衛から出ている。『国書総目録』にない書だが（同名の書が、『近世漢学者著述目録大成』に河野界浦の著として載せられている旨は載る。国文学研究資料館の古典籍総合目録データベースにも現時点では同様）、国立国会図書館サーチによって、島根県立図書館の所蔵を知ることが出来る。同館OPACには、一八〇〇年に宜英堂から出版とあり、宜英堂は奈良屋長兵衛で年も合う。早く享保に刊行されている同著者の『本朝年代即鑑』（唐土年代即鑑）を含むの改題本かと思われるが、未見である。

さて、本『名乗即鑑』の内容は、「韻鏡反切」と銘打ちながらも、この書だけを使って人名を反切することは出来ない。木火土金水の五行に配された三十六字母に従って漢字を置き、各字に名

乗をつけるとというのが基本である。

「見下九十三父字木姓之字也」のように、「A下B父字C姓（之字）也」という形で、Aには三十六字母のいずれかが、Bには、そこに置かれている漢字の数が、Cには木火土金水のいずれかが入る。声母の配列順は、木火水金土（牙音・舌音・唇音・齒音・喉音）の後に半舌半齒の来母・日母となっている。なお、本文では、来母は火、日母は金となっているのに、凡例では、来母は半火、日母は半金となっていて、厳密に言えば一致しない。

該声母の漢字（及び、その名乗）が示された後、凡例にいう、父字とある内の一字と。母字とある内の一字とを合せて反切するなり。たとへば、公父風字の返し弓子の字。公隆の反も。貢雄の反も弓の字なり。

を例示したものが示される。見母の字と反切して「弓」になる反切下字（母字）として、風・充など十の東韻三等字が示され、これら各字にも名乗訓が付されている。東韻三等字に次いで、入声屋韻三等字で「菊」、脂韻合口字で「亀」、微韻開口字で「機」、上声尾韻合口字で「鬼」、上声姥韻字で「矩」、諄韻字で「磨」、入声術韻合口字で「橘」、戈韻字で「戈」、上声寝韻字で「錦」、陽韻開口字で「薑」、尤韻字で「鳩」、侵韻字で「金」になることが示される。母字の例示がもとも多いのがこの見母の十三例であり、他の声母は多くて八例で、一例しか示さない声母も九ある。入声屋韻三等字は、知母の箇所でも反して「竹」になるものとして示され、その「母字」自体も、見母の「竹」が知母では子字

となり、見母の子字「菊」は知母の箇所には見えないというだけの違いで、「福岡育俣六塾祝郁陸馥」は名乗訓も含めて同じである。凡例には「母字の数九百四十一字」とあるが、このように重複しているものであり、異なり数としては、これより少ない。なお、「此書載する所、父字の数九百八十三字、母字の数九百四十一字、これを互に用る時は、凡そ九萬二千五百の名乗を生ずるなり」とあるが、九八三×九四一は、九十二万五千三であつて、一桁ちがつている。

四九丁表、来母字を「質一<sup>シツツ</sup>朥」などの質韻字と反切すれば、当然、リツになるが、「粟<sup>シヨク</sup>」としている。左訓に「アワ」まで見えるが、「粟(クリ)」であるべきで、この書の粗雑さを示している。ともあれ、この書だけでは人名を反切することは行えず、声母によつて名乗り字を配列して、反切の例を示した書、ということになる。五行によつて名乗り字を並べたものであれば、節用集の付録などにあるが、この書は、それをもう少し、もつともらしくしたものである、ということであろう。

### 三 宝暦版『韻鏡安見録』

架蔵の『韻鏡安見録』<sup>(19)</sup>は、題簽に「韻鏡安見録 全」とあり(子持野)、内題は「韻鏡名乗反字安見録」で「加陽金澤士多田秀洞撰」、柱には「安見録」。

刊記には、

寶暦四歲戊冬

湯島切通  
泉屋判三郎  
日本橋通二丁目  
戸倉屋喜兵衛  
とある。本の大きさとしてはやや小ぶりの中本だが、版面は小本相当で、『名乗即鑑』と同程度である。



韻鏡名乗反字安見録  
・ 加陽金澤士多田秀洞撰  
一人名ヲ反切スルハ音和ヲ取ルヲ  
爲正故ニ此書ノ反切四同音和三  
同音和異位音和希ニ憑切ヲ用ユ  
類隔往來等ノ悪キ反切ハ一向除

ナル也

廣瀬幽閑末流爲童蒙撰之者也

寶曆四歲 戌冬

湯島切通

泉屋判三郎

日本橋通二丁目

戸倉屋喜兵衛

刊記の直前の文言は、この丁の表からのものであり、『名乗即鑑』で「韻鏡反切名乗即鑑」とある最左の野の一つ右の野から『名乗即鑑』の凡例の末尾にあった文言と同じものが書かれている。

右父字数九百八十三字 母字数九百四十一字 凡九萬二千五百之名乗となる也

廣瀬幽閑末流爲童蒙撰之者也

本書には『名乗即鑑』の序や凡例にあたるものはなく、内題と著者名の後、次のように始る。

一人名を反切するは音和を取るを爲<sup>レ</sup>正<sup>レ</sup>と。故に此書の反切、四同音和・三同音和・異位音和、希に憑切を用ゆ。類隔往來等の悪き反切は一向除之。

一 歸納の字は気形器財の類を吉とす。故に韻鏡書面の上にあられ反字に可<sup>レ</sup>用字を悉く取<sup>レ</sup>之。鬼鳳龜虎龍は凡下の人可<sup>レ</sup>忌<sup>レ</sup>之

一 相生は人人の姓を檢<sup>かんが</sup>へ相應の字を可<sup>レ</sup>取 木姓の人には火姓の字を可<sup>レ</sup>取吉也。水姓の字も相生木姓の字を取も比和とて吉也。相生相剋は水生木・水剋火・火剋金・木生火・木剋土・金生水・金剋木・土生金・土剋水也。先人謂へる事あり、名は者實之賓也 古者より名に依て身を喪<sup>うしな</sup>へる人多し此に奇異なることなり。自身心を寄<sup>よ</sup>て名を定めたるを、貞齋曰愚。数人反切するに貧富禍福を先として其餘の世事に交<sup>まじ</sup>る、轉變得失毫釐も差<sup>ちが</sup>ふことなし。吉なれば幸也。若し凶なるは文字を易改めんこと第一也。

一 此書、父字の内一字と、母字の内一字を合せ反切すれば反字あり。たとへば公風の反し弓の字、公隆の反しも弓<sup>20</sup>。貢雄の反しも弓なり。餘は准<sup>これに</sup>之。

一 上の公の字を父字と云、下の風の字を母字と云、反字弓の字を子とするなり。

この文章が三丁目表まであつて、その裏からは『名乗即鑑』と内容のものが五十一丁目表の途中（上記「右父字数」の前）まで続く（細かい違いは後述するが、上記の数字の矛盾、「粟」も同



様である。

この文章の始めの部分は、人名反切を弘めたものとされる『韻鏡開奩』<sup>(21)</sup>で、

人名の反切には。音和を取を為<sup>レ</sup>正<sup>ト</sup>。類隔・寄韻・往來の例、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>用。憑切・憑韻・廣通・偏狹などは又用ること<sup>レ</sup>之あり。所反<sup>レ</sup>字に嫌字あり。皇帝・鬼神・麟・鳳・虎龍等の字の類、人に依て忌べし。五行の相生を取ること肝要也、假令<sup>タレハ</sup>上の字屬<sup>レ</sup>木に、下の字屬<sup>レ</sup>火等の類は相生にして吉也、上の字屬<sup>レ</sup>木に、下の字屬<sup>レ</sup>土に等の類は相尅<sup>レ</sup>にして不可也。又上下の字同く屬<sup>レ</sup>する一行に者は比和にして可也。

と書かれて以降、人名反切の書に多く見られるようになった文言の影響下にあるものである。

第三条に見える貞斎の名で示されるように、毛利貞斎の『韻鏡秘訣袖中抄』<sup>(24)</sup>卷之一の十八丁裏からの記述と比較すると、『韻鏡開奩』の文言よりもこれに近い。

一 人名を反切するは。音和を取を為<sup>レ</sup>正<sup>ト</sup>。反切數多あれども類隔<sup>きやく</sup>・寄韻・往來必ず不可用之。憑切・憑韻・廣通・偏狹などは用ることあり。然れども不好ことなり。

一 歸納<sup>きだふ</sup>の字は氣形<sup>きぎやう</sup>一切の生ある器財<sup>きざい</sup>の類を吉とす。然れども皇帝・鬼神・麒麟<sup>きりん</sup>・鳳凰<sup>ほうわう</sup>・龜<sup>き</sup>・虎・龍の字は凡下の人には可<sup>レ</sup>忌<sup>い</sup>。

【下略】  
一 相生は【中略】人人の姓を檢へ相應の字を可<sup>レ</sup>取。名は者實之實也。<sup>(25)</sup>古者より名に依て身を喪へる人多し。此に奇異

なることあり。自身心寄て名を定めたるを、愚。數十人反切するに。貧富禍福を先として其の餘の世事に交る。轉變得失毫釐も差ふことなし。吉なれば幸也。若し凶なるは文字を易改めんこと第一なり。

漢字の訓などは、貞斎の影響下にはないように見えるので、『韻鏡秘訣袖中抄』から直接引いたのではないし、『韻鏡秘訣袖中抄』だけを見たのではないと考えるのが適當であろう。

上述のように、『名乗即鑑』の凡例は、『安見録』にはないものであるが、『安見録』のこの文章に基づきながら書かれたものと思われる。

#### 四 安永刷の『韻鏡安見録』

安永の奥付をもつ『安見録』は、天理図書館と東京大学文学部図書館に蔵されている。天理図書館本<sup>(26)</sup>によれば題簽は宝暦版と似ているが（『韻鏡安見録 全』子持野）、こちらが、やや大きい。刊記は、

寶暦四歲戊冬元板

安永五丙申年春再板

東都書肆 日本橋通南三町目  
山口吉郎兵衛

で、『寶暦四歲戊冬』の部分は、宝暦版と字配りや字体など同じである。前掲の「割印帳」では「板元売出し 前川六左衛門」であったから、後刷であろうか。山口吉郎兵衛は矢島玄亮「徳川時



代出版者出版物集覧』などを見ても、安永期のみの刊行だったようである。

さて、『名乗即鑑』の大部分（序・凡例・最終丁を除く）は、安永の『安見録』の覆せ彫りであると思われる。ただ、同じ板木によるもののように見える丁もあり、これについては、よりよい刷のものを見て考えねばならない。

その安永の『安見録』と宝暦版の関係はどうかというと、安永のものには、奥付に「安永五丙申年春再板」とあるが、全体を見ると、宝暦の版をそのまま使って刷った丁もあるし、宝暦版に埋木を入れて字句を訂正して刷った丁もあると思われる。また、振り仮名などを改めるには版を改めた方がよいと判断したためなのか、板木が使えなかったのか、覆せ彫りと思われる丁もある。従って、厳密には「安永版」とは呼べないので、以下では「安永刷」と称することにする。

埋木を入れて字句を訂正して刷った丁の例としては、4丁目があ。その表、中央にある「継」の字、宝暦の『安見録』では略字体の「継」だが、『名乗即鑑』では「繼」になっている。これは、安永刷では、「繼」の旁と振り仮名部分が浮かび上がるように見えて右横の罫線が薄れ、ここが埋木による修訂であることをうかがわせている。安永刷の写真がないので、ここには示せないが、その覆刻である『名乗即鑑』を示すことにする。

振り仮名の訂正などには、訂正したものを版下にしての覆刻がなされたようである。三十三丁表の「自慈字」の振り仮名は宝暦

鬼 <small>キ</small>	徑 <small>ミチ</small>	耿 <small>カウ</small>	久 <small>キウ</small>	甲 <small>カウ</small>	糾 <small>キウ</small>
紕 <small>キ</small>	救 <small>キウ</small>	金 <small>キン</small>	據 <small>キョ</small>	居 <small>キョ</small>	舉 <small>キョ</small>
古 <small>コ</small>	矩 <small>コ</small>	顧 <small>コ</small>	皆 <small>カ</small>	改 <small>カ</small>	兼 <small>ケン</small>
監 <small>カン</small>	鑑 <small>カン</small>	國 <small>コク</small>	繼 <small>ケイ</small>	介 <small>カイ</small>	价 <small>カ</small>
圭 <small>ケイ</small>	桂 <small>ケイ</small>	佳 <small>カ</small>	解 <small>カイ</small>	卦 <small>ケイ</small>	怪 <small>ケイ</small>
故 <small>コ</small>	根 <small>コン</small>	良 <small>リョウ</small>	吉 <small>キツ</small>	昆 <small>コン</small>	均 <small>コン</small>
鏡 <small>キョウ</small>	綱 <small>コウ</small>	驚 <small>キョウ</small>	固 <small>コ</small>	計 <small>ケイ</small>	鷄 <small>ケイ</small>

宝暦版4丁表

版で「シ」、安永刷で「ジ」、裏の「錢」左訓は宝暦版「ゼニ」、安永刷「ゼニ」であるが、この丁は覆刻と思われる。

四十二丁は、覆刻ではない異版である。図に示すように、『名乗即鑑』の方が字間が広い。安永刷も同様である。

さて、上記のように、安永刷では、宝暦版からの修訂が行われているわけであるが、その多くは、振り仮名など片仮名をあらためたものである。ただ、その修訂に、なにか方針のようなものがあるようには見えない。例えば、十七丁裏の文字群の振り仮名を改めているのだが、「農」のドウをナウに、「能」のトウをノウに、「囊」のダウをナウにする一方で、「暖ダン・那ダ・納ダフ・煖ダン」の濁点を削っているのは、濁音を避けたという点で



たのかもしれない。

いずれにせよ、安永刷の『安見録』は、宝暦版と比較して、本書の性格が、より明らかとなるというようなものとは見なしがたい。ただし、宝暦版『安見録』と天明版『名乗即鑑』の間をつなぐものとしては、欠かすことの出来ない存在である。

#### おわりに

以上、『韻鏡安見録』『韻鏡反切名乗即鑑』の内容と、その刊行について述べた。本書は、韻鏡・反切といった題名に関わらず、頭子音による漢字の判別が可能なのみであった。時代が寛政三年にまで下れば、より簡便な形の高井蘭山『袖珍名乗字引』が出て、その後、広く行われることになるのだが、その前段階の書として行われたのが『名乗即鑑』であった。『名乗即鑑』は安永刷『韻鏡安見録』を覆刻して序と凡例を加えた改題本であり、安永刷『安見録』は、宝暦版『安見録』の版本を使った丁と、覆刻による丁と、版下を起こした丁とがあることを述べた。

#### 参考文献

- 一戸渉(二〇一二)『上田秋成の時代 上方和学研究』ベリかん社  
岡島昭浩(二〇〇二)『元禄の辞書』井上敏幸・上野洋三・西田耕三編『元禄文学を学ぶ人のために』(世界思想社)  
岡島昭浩(二〇〇八)『五音歌』の変容―外郎売りと姓名判断―飯倉洋一編『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書

岡島昭浩(二〇一〇)『寺尾東海の韻学と荻生徂徠』『語文』九二・九三合併号

福永静哉(一九九二)『近世韻鏡研究史』風間書房

馬淵和夫(一九五四)『韻鏡校本と廣韻索引』日本学術振興会

三沢諄治郎(一九五二)『韻鏡諸本並關係書目』私家版

矢島玄亮(一九七六)『徳川時代出版者出版物集覧』同刊行会

#### 注

(1) 『韻鏡』の項(岩淵悦太郎執筆)。「増補日本文学大辞典」では、「多田秀洞」となっている。

(2) 京都 武村新兵衛刊。『韻書字書』の項の冒頭(「江戸時代書林出版書籍目録集成」第三卷二〇〇頁)。

(3) はほ同文が、明治三年官許の『名乗字叢』(荻田嘯訂正、河内屋喜兵衛梓、明治十六年御届の『名乗字引』(大阪府北村宗助)に、巻末広告として見える。なお、後者は前者の改題本である。また後者で伊勢山田加藤長平求版とあるものも、同じ広告を有する。

(4) 前掲の江戸の割印帳では、この本が「東海述」とされてしまっている。

(5) 左思「三都賦」に序して洛陽の紙価を高からしめた皇甫謐の故事による。

(6) 本書十五丁裏にも、「淵<sup>ツル</sup>セ」と見える。

(7) 国立国会図書館亀田文庫蔵本。天理図書館821.307は『五音五次第一』の名で登録され、序跋等がないが、『元禄十年歳次丁丑冬十月日』の込淵幽閑改正」とあり、四十三枚の韻図も同じである。

(8) 静嘉堂文庫所蔵国語学資料集成・写本。

(9) 馬淵(一九五四・四六二頁)に引く神宮文庫蔵『韻鏡十二反切』も同じ文言を有する。

- (10) 元禄四年刊。また、寛文三年刊『尋出人名了賢記』（天理図書館蔵）の外題も「名乗手鑑」である。
- (11) 江戸の割印帳でも、ともに西村源六が売出し人で、名乗即鑑は天明六年極月に、排名即鑑は七年三月に割印を受けている。
- (12) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に島居清による解説が、『俳文学大辞典』（角川学芸出版）に藤田真一による解説がある。戸（二〇一二）は、第三部第二章で奈良屋長兵衛について述べるが、二二七頁で、『排名即鑑』にも言及する。
- (13) 『近世出版広告集成』（ゆまに書房、一九八三）第四卷四〇頁に載るのと同じものである。
- (14) 冒頭の見溪群の三声母のみ「C姓之字也」で、疑母以降の三声母は「C姓也」。
- (15) 『切韻指掌図』『切韻指南』における声母の順序ということも出来る。
- (16) 「風・充・豊・雄……」と並べるだけで、東韻の字であるとは書いていない。
- (17) 実際は、延べで数えても、九百以下のものである。
- (18) 父字の数は、上記Bの数を足せば一〇〇〇になるが、「徹下十五父字火姓也」とある徹母の字が十四しかないので、九九九字であらうか。
- (19) 平成二年十一月、金沢市の古書店うつのみやの『古本通り』第一号に載せられたもの（一二二番）。
- (20) 「弓」の後の句点は原文のまま。
- (21) 正保四年刊の九州大学附属図書館蔵本による。
- (22) 福永（一九九二）第三章第四節
- (23) 『唐韻指迷』の尾形貞斎もあるが、『唐韻指迷』は寛政十一年の刊で、かなり下がる。
- (24) 架蔵の貞享二年刊本による。
- (25) 『韻鏡袖中秘傳抄』巻七「自己に好で名<sup>な</sup>きし文字必ず其の身の吉凶著しき事」にも、「誠に莊子が所謂名は者質之賓なり也」と書くが、「貧富禍福」などは書かれていない。
- (26) 卷末に四丁、明治期のものと思われる手書きのものが綴じ込まれている（佐枝得通「姓名ニヨリテ運命ヲ豫知スル法」）が、ここでは触れない。東大本の題簽は部分的な残存で、「鏡」の右下半分と「安見録」が見える。なお、東大本は天理本よりも刷が早いと思われる、小差もある。三八丁表の「昌」の付訓部分が、東大本では黒い四角形であったのが、天理本では、宝暦版と同じ訓に戻して刻している（文字の配置は『名乗即鑑』と同じ）。
- (27) 他の声母では、そのような方針があるわけではなく、例えば、明母や徹母では、マ行バ行ハ行が混在したままである。

（おかじま・あきひろ 本学大学院教授）